学級活動の充実

（その１）

～学級活動（２）における食育指導～

食育の授業って、どうすればいいのかなぁ･･･

食育については、給食の時間を中心的な指導の場とし、教科等との関連を図りながら総合的に取り組む必要があります。栄養教諭、学校栄養職員、養護教諭等の専門性を生かすという視点も大切です。

学級活動における食育については、学級活動（２）の「食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成」（小・中）として指導することになりますが、教科指導ではないので、「学級活動」としての指導が求められます。決して、知識を教える指導ではありませんので、特に注意しなければなりません。

【専門性を生かすとは】
栄養教諭、学校栄養職員、養護教諭が持っている課題解決のヒントや予想の裏付けとなるような知識や資料などを、児童生徒の実態に合わせて効果的に活用すること。

では、学級活動（２）としての指導とはどのようなものか見てみましょう。
まず、学級活動（２）の目標

諸問題を解決しようとする自主的，実践的態度や健全な生活態度を育てること

から、具体的に身に付けさせたい力・態度を考えてみると、

❶ 自己の課題としてとらえようとする。
❷ 解決方法を、他と話合いをとおして探ろうとする。
❸ 自分なりの解決方法を見つけることができる。（自己決定）
❹ 強い意志をもって実行できる。

となります。

学級活動（２）の授業では、上記❶～❹を育成させるための活動等を位置付けることが大切です。具体的にどのようにするかについては、次ページに参考例として、小学校３年生の学級活動（２）の指導案を掲載しました。特に緑の吹き出しにある❶～❹の説明は、上記の❶～❹に対応していますので、よく確認してほしいと思います。

また、学級活動（２）の時間では、上記❹のように、自己決定したことを、児童生徒が「即実行する」ことが大事になります。参考例では、その実行を継続させる工夫もされています。

ぜひ参考にしてほしいと思います。

参考例　小学校学級活動　　**3年「苦手な食べ物となかよくなろう」**

◎　ねらい　　好き嫌いなく食べることの大切さを理解し、食べる意欲を高め、食生活に生かす。
◎　食育の視点　心身の健全な成長や健康の保持増進のために望ましい栄養や食事のとり方を理解し、よりよい食習慣を身につける。(食べる力)
給食にかかわっている人々への感謝の気持ちをもつ。(感謝の心)

❹実践の定着化・継続化が図られるようにする。

1　活動計画

事前	(1)　好き嫌いアンケート(給食委員会) (2)　家族へのアンケート、メッセージ依頼 (3)　給食の残菜調査(給食委員会)	事後	(1)　給食の残菜調査(給食委員会) (2)　実践カードへの記録 (3)　給食、朝・帰りの学活での称賛、指導等

2　学習過程

段階	学習活動・内容	時間	形態	指導上の留意点　※評価 T1（学級担任）	T2（学校栄養職員）
導入	1　好き嫌いアンケート結果を発表する。 2　課題に気付き、自己の食事のとり方を振り返る。 3　本時のめあてをつかむ。 苦手な食べ物となかよくなろう。	10	一斉	○　給食委員にクイズ形式で発表させ、関心が高まるようにする。 ○　苦手な食べ物に共通するものは何か考えさせる。 ○　家庭や給食で苦手なものが出たときどうしているか振り返らせる。	結果の予想・発表を通し、児童が主体的にかかわれるようにする。 ❶取り上げた問題にかかわる自分自身の状況を振り返らせる。
展開	4　学校栄養職員の話を聞き、自分の苦手な食べ物の栄養や働きについて質問する。 5　苦手な食べ物の克服方法を話し合い、発表する。 ❷話し合いを通して、問題の原因や解決方法について考える。 6　家族からのメッセージを聞く。 ❸これから自分が努力する方法などについて具体的に自己決定する。	10 10 5	一斉 班 一斉	○　質問ｺｰﾅｰを設け、日頃疑問に思っていることを質問させる。 ○　なぜ食べられないのか理由を考えさせる。 ○　苦手な食べ物をおいしく食べるためのアイディアを、班ごとに考えさせる。 ○　苦手な食べ物が食べられるようになった友だちの話を参考にさせる。 ※　食べ物のよさがわかったり、食事を作っている方の気持ちを理解したりすることができたか。(食べる力・感謝の心)	○　苦手な食べ物の栄養や栄養のバランス等について説明する。 ・　児童の興味関心を引き出しながら話をする。 ・　教科指導や発達段階等をふまえて話をする。 ○　家族からのメッセージを、児童の健康を願っていることが伝わるよう紹介する。
終末	7　自分なりの方法やめあてを決め、カードに記入し、発表する。	10	一斉	○　実践することをワークシートに書かせ、発表させる。 ※　これから自分でできることを決めることができたか。(食べる力)	○　児童の学びについて、専門的立場から称賛・助言する。